

有名キャラ官能小説CG集第282弾!!!

昇天せよ、これがメガエクスターシー!

メガエクスターシー

ハアハアCG集

Win 95/98/ME Win 2000 1GB us Memory 800x600 65536Color マウス トラックボール CG集 成年向









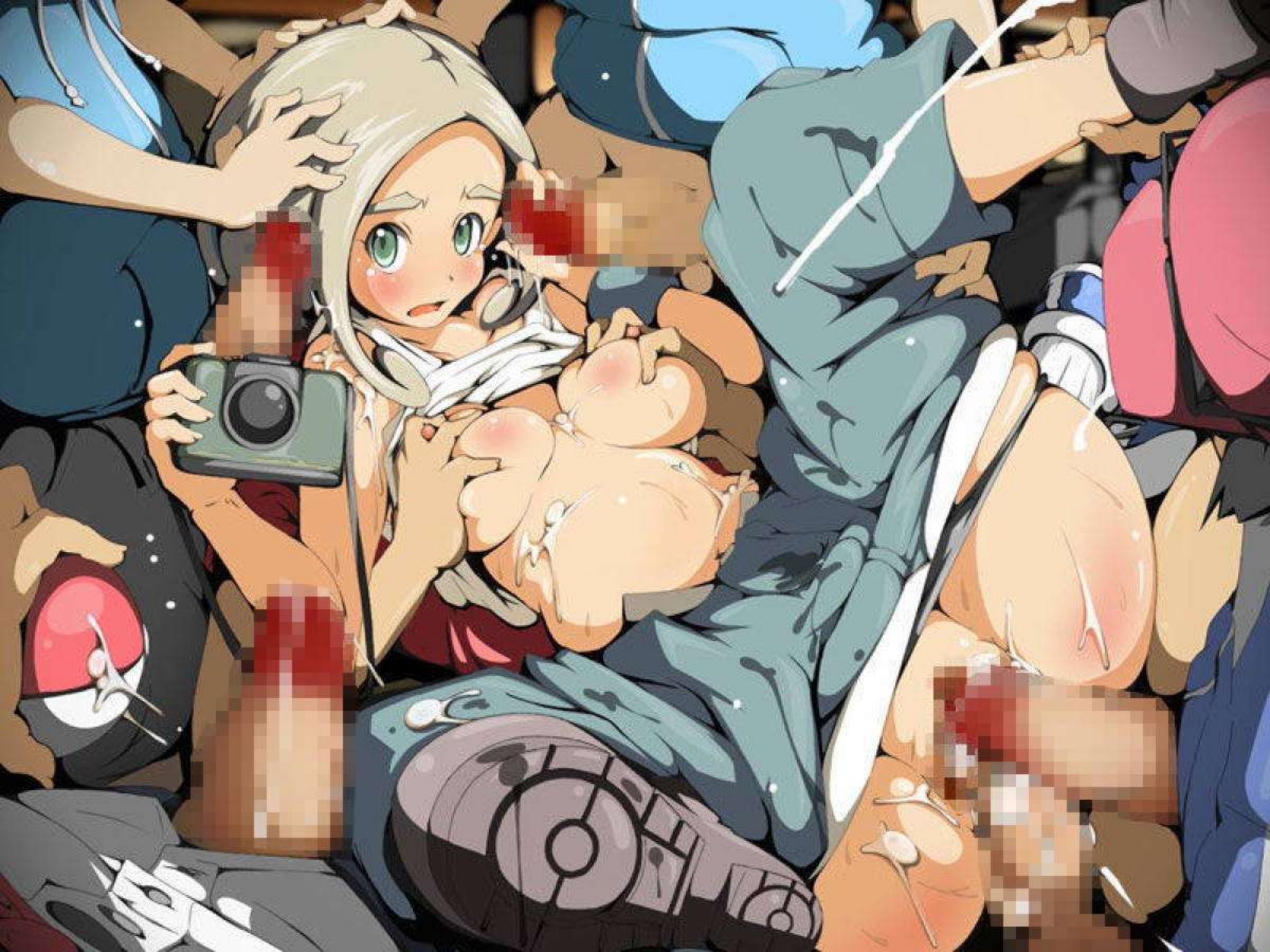














モーモーミルク売りに励むオカルトマニアのクレールだったが、どう頑張ってもぎこちない笑顔しか浮かべる事ができず、売り上げは伸び悩んでいた。そんな状況で他のミルク売り達に倍以上も売り上げて差をつけられてしまうと、余計に焦って売り上げを落としてしまったクレールに、ミルク売り仲間からちょっとしたアドバイスが送られる。

それは普通であれば信じられないような、実行しようとも思わない行動なのだが、追い詰められていたクレールは疑う事無く実行してしまうのだった。

「あの・・・モーモーミルク・・・いかがですか？買って頂けるのなら・・・お客様のミルク・・・搾ります・・・から」

最初はその言葉の意味がわからず、ポカンとした表情を浮かべていた山男や庭師達は、すぐに理解していやらしい表情を浮かべながらミルクを購入するのだった。

ようやくミルクが売れた事に喜びながら、クレールは並ぶ男達の前に跪いてオズオズとズボンに手を伸ばしていく。

そして、教えられたようにジッパーを下ろして、そこで静かにしていたモノを外に出すと、ゆっくりと指先を這わせながら刺激を加える。

「今日は・・・わたしがミルクを・・・搾りますね・・・どう・・・です。気持ちいい・・・ですか？」

性の知識などまったくなりクレールの手コキは、ろくに性感を刺激できないもので、ただ肉棒を単調なリズムで上下に擦るだけのものだったが、そのぎこちなさと、必死さが男達を興奮させる。

ろくに快感こそないものの、みる間に肉棒は膨張していき、クレールの手の中では取まらなくなっていくのだった。

信じられないくらい巨大になった肉棒に戸惑い、擦る方法すらわからなくなって、手の動きがしがたいに止まっていく。すると、男達からクレールへアドバイス・・・というよりも、要求の声が飛ばされる。

「しっかり擦ってくれないと、ミルクが出せないなあ・・・」

「そんなんじゃない全然ダメだよ」

「そ、そんな・・・すみま・・・せん・・・でも、どうすれば・・・」

「わからないの？じゃあ・・・口でしゃぶってみたい、舐めたりしてよ」

「は、はいっ！」

言われたようにすれば、ミルクを搾り出せる。そう思って男の指示に従ってペニスの先を咥え込むと、亀頭をペロペロと舐めまわす。

小さな舌で尿道のあたりを何度も舐めていくと、そこから濁った先走りの汁が滲み出てきて、その味にクレールの顔が僅かに歪む。

だが、文句を言う事などできない。ミルクを売るためにはこうするしかない、売れたのだから、こうするしかないのだから。

代わる代わる男達の肉棒を咥えて、しゃぶり、舐め回していくと、少しずつだが奉仕の方法がわかってくる。

「んんっ・・・んむうっ・・・んんっ！」

「いいぞ・・・上手くなってきたじゃないか！」

「そうだ、その調子で・・・」

「俺達のミルクを搾り出してくれよ！」

「ぶはぁ・・・あ・・・はいっ！」

肉棒がピクリと反応する場所を、性感があるのを知ったクレールは、なるべくそこを刺激するように手や舌を動かすようになり、肉棒に快感が送り込まれるようになっていく。

すると、その必死な様子と相まって、快感が急速に広がって肉棒を濡かす。

下半身がクレールに吸い込まれるような感触と共に、袋の中に溜まっていた男のミルクが込み上げてきて・・・。

「ああっ！射精するっ！」

「しっかり受け止めるんだっ！おじさんのモーモーミルクっ！」

「ほらっ！顔で味わってくれっ！」

ビュグビュグビュグビュグンッ！ドピュドピュビュクククウウウウッ！！

「っ?! うぁぁ・・・あ・・・熱い・・・ミルク・・・いっぱい・・・搾れた・・・あはぁ・・・」

男達が腰をクレールから離すと、ずらりと顔の前に並んだ肉棒達が一齐に顔射して白濁をぶちまけていく。

少しギョロついてクマのある瞳や、ポリウムのある黒髪に向けて精液がこれでもかと発射されて、黒の上を白く染められてしまう。

大量に降り注ぐ白濁の熱さにクレールは驚き、硬直していると、ポカリと開いた口の中にまで射精されて、舌のような酸っぱいようなミルクを味合わされる。

飲み込めずに思わず吐き出そうとするのだが、男達はそれを許さず、むしろ射精したすべての精を飲むよう要求してくる。

「おいおい、何で吐こうとしてるんだ？」

「搾ったミルクは全部飲んでもらわないとな・・・」

「ほら、口を開けて！」

「ああああっ！そん・・・な・・・」

クレールの顎に男達が手を伸ばすと、無理に口が開かされてしまう。

反射的に男達の行為から逃れようとするクレールだったが、数人がかりで押さえ込まれてしまうとそれもできず、次々に顔射された精を口の中へと放り込まれていくのだった。

だが、男達はすぐに飲み込ませず、喉を押さえるようにしてせき止めつつ、精を口内へと溜めて・・・すべてが集まった所でクレールにそれを嚥下させる。

数人分の精液カケルをクレールは泣きそうな顔をしながら飲み込み、何度もむせながら胃へと送り込む。

そうやって飲み干してみると、込み上げてくる吐き気に体は何度も震えてしまうばかり。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

それでも、やっとモーモーミルクが売れた事にクレールは喜び、安堵の表情を浮かべていた。

売れなければどうしよう、売れなければ自分はダメだ。そこまで追い詰められていたクレールにとって、形はどうあれミルクが売れた事は嬉しかったのだ。

と、そんなクレールを誘惑するように男達が声を掛ける。

「ミルクが売れて嬉しかったのかい？おじさんも、ミルクを飲んでもらえて嬉しいよ」

「・・・ところで、もっとミルクを売りたいかい？さらに10本・・・いや、30本買ってほしいんだが」

「その代わりに、今度は別の場所でおじさんたちのミルクを搾って欲しいな」

「30本?! そ、そんなに・・・いいん・・・ですか？なら・・・わたし・・・でも、どこで搾れば・・・？」

男達に提示された魅力的な買取の提案に、クレールは吐き気も忘れて飛びついてしまう。

それだけミルクが売れなかった、何をしても買ってもらいたい、という事なのだが、そのせいでとんでもない提案を受け入れる事になる。

「ここを使っておじさんたちのミルクを搾って欲しい！」

「そうすればもっとミルクを買うよ！」

「いいよね？ミルク売りたいんだよね？いいよね?!」

「あっ・・・ソコは・・・ああ・・・それは・・・ああんっ！」

男達はクレールのスカートをとたくし上げると、そこに隠されていた下半身に手を伸ばしていく。

黒っぽい服装とは正反対な純白のショーツ越しに秘所を触られて、反射的な嫌悪感と抵抗に言葉を詰らせるクレールだったが、答えられないでいる彼女を強引に押し切るように男達は行為を続けていく。

乱雑にショーツが脱がされてしまうと、露わになったろくに毛も生え揃っていない縦筋に指が当てられて、硬い隙間をほぐすように擦られる。

「んはっ! あっ! あっ! ああ! これで・・・本当に・・・買ってくれる？」

「買う買う! 買って!!」

「何なら30本以上でもいいよ? でも、そのためには・・・ね」

「いいよね? ミルク買って欲しいんだよね? だったら、おじさんたちのミルク・・・ここで買ってくれるよね？」

「・・・は、はい」

30本以上ものミルクを買ってもらえれば、今まで売れなかった分を取り返せる。そう思うと、拒絶はどこかに消えてしまって、クレールは自分から男達に向かって体を開く。

本能的な恐怖のせいで身体は震えていたものの、大きく足を開いて秘所を突き出し、そこで肉棒を受け止めようと、ミルクを搾り出そうとすると、待っていたとばかりに男が腰を寄せる。

先ほど射精したばかりとは思えないくらいにピキピキと勃起しきった肉棒が押し付けられて、硬い肉唇を押し分けながら侵入していく。

鈍い痛みが下半身から広がっていくが、それ以上に肉棒に奉仕してミルクを出してもらおう、そうしてもっとミルクを買ってもらおうという気持ちが強く、破瓜の痛みなどどこかに行ってしまう。

「おお・・・キツキツ、だな」

「気持ちいい・・・ですか・・・？」

肉棒よりも狭い膣内は内側からの圧迫でパンパンに膨れ上がり、密着した肉棒の感触をダイレクトに感じてしまう。自分の中で脈打つ肉棒の感触に若干の苦しさを感ずるものの、それだけ密着しているからこそ、クレールは腰を動かし膣肉をうねらせて、肉棒の性感を刺激しようとする。

狭いからこそその強烈な奉仕に、男の腰は何度もピクつき、快感に蕩かされて獣のような声を上げると、火がついたようにピストンを開始する。

体内で暴れる肉棒によって膣内は強引に拡張されて、隙間を作られながら擦り上げられると、その衝撃によってクレールの意識が飛んで、時折奉仕が途絶えてしまう。

それでも必死になって肉棒へと追いつき、快楽奉仕を続けていると、順番を待つのももどかしいとばかりに、両手や髪の先、腋や膝裏といった場所にも肉棒が押し付けられて、それぞれの部分からも快楽を抽出されていくようになる。

全身に迫る肉棒の群れに、クレールの処理能力はパンクして、どう奉仕すればいいのかわからなくなっていくと、目のまわっている彼女をさらに混乱させるように男達は責めを強めていく。

「フアあああ! ああああ! あああああああ!!」

手を無理矢理上下に動かされて、握られた肉棒の根元から先まで往復し続けて、髪を肉棒に巻きつけられたと思えば毛先で性感を刺激するのに使われて、腋や膝裏に押し付けられたペニスは少し蒸れた感触を楽しむように圧迫を要求される。

身体のあらゆる場所を使って、クレールの全身を精処理の肉オナホにでもするようにして、男達は快楽を求めまくる。

そして甘美な感触にうめき声をあげつつ、何度も身体を震わせる。

「あああ! いいよ! おじさんのミルク・・・凄い搾り取られそうだ！」

「こっちも出るよ・・・もう搾られちゃうよ! いいね・・・クレールちゃんの身体・・・いいね！」

「たっぷりミルクを搾ってもらったら・・・たくさんミルク買っちゃうからね！」

「ふぁあ! あああ! 嬉しいっ! 嬉しい・・・ですっ! たくさんミルク搾り・・・ますっ! だから・・・いっぱい出して・・・くださいっ！」

クレールがすっかり正気を失った表情で男達に精を求めると、その様子に心を掴まれた男達が連鎖的に果てて、熱いミルクを発射していく。

ビュグビュグビュグビュグンッ! ドピュドピュビュクククウウウウッ!!!

今度は顔だけでなく胸やお腹、足や腕、そして膣内にまで射精された事で、クレールは身体の中も外も白濁まみれになっていく。

全身で大量の精液の熱さを感じると、これでミルクをもっと買ってもらうのだと、クレールは嬉しさを通り越して恍惚の表情を浮かべてしまう。

「ああ・・・おじさんたちの・・・ミルク・・・たくさん・・・かかっている・・・これで・・・いっぱい・・・ミルク買って・・・もらえるよお・・・」

そんなクレールに最後の一滴まで残さずに射精し終えた男達は、約束の通りにモーモーミルクを買って、すっきりとしたような表情で去っていくのだった。

残されたクレールは全身を精液まみれにしながら完売を喜び、もっと早くこうしていれば・・・と、思うのだった。

そして、それから・・・。

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・



時にセレナの後ろについて行動を共にして、こまめに回復をしてくれるサナだが、彼女が回復役として薬などを用意できるのか？
その謎について尋ねてみると、そんな知りたいのなら教えてあげると、言われて連れられた先には、きずぐすりなどを作っているメーカーの一室だった。
部屋に入るなり、案内をしたサナと同行したセレナとコルニの三人は手足を何かに絡め取られてしまう。

「何これ??ど、どういふ・・・」
「突然なんなのよ・・・ふえ?ええええ?!」
「あう・・・今日はいつもより激しいかも・・・」
部屋に設置されていた機械から伸びる触手が女性達の手足に絡まり自由を奪うと、部屋の中央へとズルズルと引きずられてしまう。
そこに待ち構えていたのはメーカーに勤務する男達で、誰もが下品な笑みをその顔に貼り付けていた。
セレナとコルニは身の危険を感じてジタバタともがき、触手の拘束から逃れようと必死に暴れるのだが、鋼の触手は人の力で振り解く事などできそうにない。
「言われた通りにお友達を連れてきたんだね・・・よし、いいぞ。これからは薬をもっとあげようか」
「好きなだけ回復できるようにたくさん・・・バックに入りきらなくなるくらいだ」
「あははは・・・嬉しいなあ・・・そんなにいっぱい・・・」
「・・・サナ?何を言ってるの?」
「まさか・・・貴方?」
「はい。皆さんにお薬をもらってるんです。それで、これはそのお代というか、もらうための協力です。友達を連れてきたら・・・もっとお薬をくれるって言うから」

一人だけ様子の違うサナに疑惑の視線を向けると、悪戯がバレたような表情を見せながらサナは答える。
男達にいいようにされるのをお代といい、セレナ達を自分と同じ状況に引きずり込むのに罪悪感を感じないまでに、サナは男達によって変えられてしまったのだと二人は感じて、背筋に冷たいものを感じる。
友人がそうなったのに気がつかなかった事もだが、激しい後悔が押し寄せてきて心がグラつくのだが、それよりも大きなモノが女性達に向かって押し寄せる。

「あああ!何よこれ!!やだ!!あああ!離してっ!この・・・ひゃっ!!」
「どこを触って・・・あああ!そんなトコ!!ダメえ!あ、あたしのアソコが・・・あああ!」
触手が手足だけでなく秘所にも伸びてくると、硬く閉ざっていた足を左右に開帳させてピンクの割れ目を露わにしてしまう。
スカートやスパッツに隠されていた部分が丸見えになり、残された唯一の布であるショーツが器用に脱がされて完全に露わとなってしまうと、セレナとコルニの顔が羞恥で真っ赤になるのだった。
頬だけでなく耳たぶまでも真っ赤にして、羞恥に震えていると、体温の上昇した身体にひんやりとした感触が入り込んでくる。

「入ってこないでえ!こんな・・・嫌あ!抜いてよ!!こんな機械・・・あああ!奥までえ!来ないでえ!!」
「うひっ!ひあああ!つ、冷たいのが・・・中に・・・あああ!掘げないでっ!ソコは・・・ダメえ!!」
機械触手による強引な開帳に抵抗の声を上げる二人とは対照的に、サナはどこかうっとりとした表情で触手を受け入れていた。
二人が少しでも膣内に力をこめて侵入を拒もうとするのは逆に、膣内を嬉しそうに震わせながら奥へと誘い込み、体内で動く触手の冷たさが中の性感を刺激してくれるように腰を動かす。
膣内の敏感な部分に触手が触れると、その冷たさで指で自慰をするのは違った快感が走り、サナは軽く身体を悶えさせる。

「ふあああ!あう!んっく・・・これ・・・凄いやお・・・ひんやりしたの・・・気持ちいい・・・」
「嘘でしょ・・・サナ・・・?」
「そんな・・・こと・・・」
目の前でよがり始めた友人の姿にショックを受ける二人だが、そんなショックも飛ぶように触手は責めを強めていく。
掘げた膣穴に新たな触手が迫っていくと、その先がグイグイと押し込まれてしまう。
浅い部分に入り込んだ触手はうねりながら何かをその先から発射して、膣内をぬめぬめの液体で濡らしていく。その妙な感触に二人が怯えたような表情を浮かべるが、サナは壊れたような笑みを浮かべて喜ぶのだった。

「何か出てるっ!何なの・・・これえ・・・うああ・・・」
「お腹の中で・・・出て・・・あう・・・お腹が・・・熱くなっている・・・ううう」
「あーっ!お薬来たあ!これを塗ってもらおうと・・・気持ち良くなるんだよお!!」
傷薬の成分を弄って作られた媚薬が大量に注入されて、肉ヒダの一本一本にまでかけられてしまうと、すぐにその効果が発揮されて三人の身体は熱く火照っていくのだった。

その変化にサナは歓喜の表情を浮かべて、媚薬まみれになっていく膣内を震わせる。
セレナとコルニはサナとは違って喜んでこそいなかったが、身体の方は媚薬によつていやらしい雌へと変化しようとしていた。
自分の身体の変化を押し殺そうと、快感に耐えようとする二人に男達が迫る。
「こんな可愛いお友達を連れてきてくれて、嬉しいよ」
「じゃあ、この子達もサナちゃんと同じように気持ち良くなってもらおうか」
「それが終わったら、いつもより多く薬をあげるよ。・・・こっちの薬も、サーピスでたくさんつけちゃうからね」

「わあ・・・嬉しいっ!嬉しいですっ!やったあ!!」
きずぐすりだけでなく、媚薬ももらえると知ったサナは満面の笑みを浮かべるのだが、そこにはどこか人を不安にさせるような狂気が浮かんでいた。
陵辱の果てに壊れてしまった友人が歓喜に震えるのを見て、二人は自分達の末路はこうなのか?と、恐怖に青ざめる。
その恐怖を現実にするように、男達が機械触手による媚薬の注入をやめにして、媚薬でずぶ濡れになったヴァギナに股間で膨れ上がった凶器を突っ込んでくる。

「ひいいいいい!いや・・・あああ!やだあ!そんな・・・のって・・・」
「こんなものって・・・ああ!酷い・・・です・・・ううう!ああ!あああああ!!」
「んんんんっ!おじさんのオチンポ来たあ!あはあ!触手もいいけど・・・オチンポも暖かくっていいよお!!」
ひんやりとした機械触手と違って、熱く脈打つモノを挿入されたオトメの秘部は、その熱さに嫌悪とは違った震えを発生させてしまう。
心では嫌だと思っているのだが、身体の方は性感に少しでも触れられただけで感じまくり、快感を発生させてしまう。正反対な心と身体の反応に二人が翻弄されていると、ペニスがさらに捻じ込まれて快感の度合いが高まっていく。
下半身が濡れるような快感が広がり、ビクビクと悶えるのが止まらない。それ程までに強力な媚薬が使われたからこそ、サナはこんなになってしまったのだろう。

「オチンポ好き!この熱くて・・・硬いの好きだよお!もっと突いて!あたしの中をズボズボって!してえ!お願いですうう!!」
「うああ!あうん!!んん!!んーっ!!」
サナは涎と嬌声を垂らしながらよがりまくり、男達にもっと快感を求めて腰を振り性感へと誘う。
自分にとって一番いい所を突いてもらえば、そのお礼とばかりに膣内にギュッと力を込めて締め付けて、ペニスの性感にも刺激を送る。
淫乱な雌の動きに男の方も興奮してきたのか、腰を動かす速度を上げていく。
結合部からはグチャグチャといやらしい音が嬌声と混じり、部屋の中に響いて耳からも犯されている感触を届けるようになる。

「サナ・・・サナあ!正気に・・・戻ってえ・・・そんなの・・・サナじゃ・・・」
「だけど・・・んん!!んはあ!こんな気持ち・・・よくされたら・・・あんっ!あああんっ!頭が・・・おかしく・・・なる・・・ううう!!」
媚薬の効果は強烈なもので、身体は望まぬ快感で溢れかえってしまう。
男達も二人にはサナと同じようになってもらおうというのか、無理すぎる挿入はせず、自分の快感よりも二人の快感を重視しているようだった。
少しでも身体が反応してしまえば、そこを責められまくって快感漬けにされると、理性を保つのも難しくなってくる。
混濁していく意識の中で、必死に快楽の海に落ちないように、溺れてしまわないように、心を強く持とうとする。

「気持ち良くなんか・・・良くなんか・・・あああ!ふああ!ああああん!!あああ!!」
「こんなのに・・・負けたく・・・ないのにつ!!んああ!あっ!あっ!あああ!もう・・・ふああああ!!」
「二人とも我慢しないで・・・んん!!素直になろうよ・・・オチンポ気持ちいいよお?!んはあ!奥を・・・ガツガツされるのいいよお!それに・・・」
サナが言いかけたもっと気持ちのいいモノを二人に発射しようというのだろう。男達は少しづつ腰の動きを早めて快感をペニスに送り込むようになる。
膨張していたペニスが快感でさらに大きくなって、根元についている袋で作られた汁を発射する態勢へと入っていく。
それを察したサナは、恍惚の笑みを浮かべていやらしく腰を振るようになる。

「あは・・・ははあ・・・来るよお・・・凄いの来るよお!二人とも・・・一緒にイこう・・・あああ!来たっ!!」
「何が・・・ふあ?あああ?!やあああ!私の中でっ!また出てっ!ふああああ!ヤバっ!何これえ!気持ち・・・いい!!ひいいいいいい!!」
「イクって・・・えええ!!?お腹の中に!!またっ!出て・・・くああああああ!あああ!ふあ!あああん!!」
「ビュブブビュクビュクドピュピュルピュルピュクンっ!!!」
「あああーっ!!んはあ!ああああ!出たあ!あたしのオ○ンコっ!オチンポ汁でいっぱいだよお!おおお!んおおお!!」

中出しされた精液が発生させる快感にサナはアクメに達して、全身をこれでもかと痙攣させまくる。
白目を剥きながらのアクメ痙攣に、その細い身体は壊れてしまうのではないかと思う程。
そんな激しいアクメと違って、二人はそれまでより強力な快感によって絶頂へと達しはしたものの、その震えは耐えようとしていたせいがい小さくて、まだ心の方も踏みとどまれたようだ。
男達が又いと押し込んできたペニスが何度も脈打ち、その先からドロドロの精液をたっぷりと射精し終えると、狭い膣内は粘り気のある白濁によってタブタブになってしまふ。

「「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」」
すっかり憔悴しながらも、理性を保って射精を受け止めた二人だったが・・・そんな二人を今度こそ快楽に落そうと、男達は二度目の行為を開始する。
休まずに犯され続けて、快感を送り続けられたら・・・それが、まだまだ数時間と続けられたら、きっと耐え切ることなどできない。
そんな絶望的な確信に二人は瞳を暗くするのだが、サナは励ますように・・・そうなるのが救いであるかのように、明るい声をかけてくる。
「二人もそんな顔しないでっ!素直に・・・オチンポが気持ちいいって認めちゃえばいいんだろ?そうすれば、とっっても気持ち良くなるんだから・・・ね?」

「サナ・・・そんなの・・・どうか・・・してる・・・」
「そうだよ・・・気持ちいいだなんて・・・」
「でも、二人の身体はこんなに感じて、反応しちゃってるよ?嘘は良くないよ?・・・ね?一緒に気持ち良くなるうう?」
そう言ってみつめてくるサナに弱々しく抵抗をするセレナとコルニだったが、二人が同じような雌へと落ちるのに、そう時間はかからないだろう・・・。



いつものようにジムで挑戦者とバトルをしていたマーシュの元に、ポケモンになれる薬というのを持った男達が現れる。半信半疑・・・というよりも、ほぼ疑いの目でその薬を見ていたマーシュだが、もしかしたら夢が叶うのかもしれない。そう思うと、試さずにはいられない。ふりそでのキリカやシオネ達は怪しすぎるからと、マーシュを必死に止めようとするのだが、いつもは動かずにいるマーシュが思い切り走り出してまわりを振り切ると、男達から薬を受け取って一気に飲み干してしまう。

「んく・・・んく・・・んく・・・ふう・・・これで、ポケモンになれるんやろうか？ そうやったらええんやけどねえ・・・」

やはり疑念の残るマーシュだったが、次の瞬間にはその世界がグルリと変わる。黒目がちな目に映る世界がぐるぐると激しく回転していたが、実際には薬によって意識が朦朧としているだけだった。しかし、それを自覚するよりも早く、フラフラとその場で何度か動いたところでマーシュは倒れてしまう。

それを受け止めようとしたキリカとシオネも巻き込まれて、一緒に13キロもある振袖の下敷きになると、そんな三人を見下ろすように男達が集まるのだった。男達は信じられないといった表情を浮かべていたが、その口の端はキュッと釣り上がっており、嫌な笑みが浮かんでいた。

「こんな手に引つ掛かるなんてなあ・・・まあいいさ。それじゃあ、さっそくジムリーダーのマーシュ・・・ゲットだぜ！」

「ポケモンになりたいっていうならさ、まずは誰かに使われないと。そうやってポケモンの気持ちを知るのが大切だぜ」

「てなわけで、俺達がポケモンとして”使って”やるからな。そうすりゃポケモンに一歩近づけるってもんだ」

無茶な理屈をこじつけて男達がマーシュを襲おうとすると、薬の効いていないキリカとシオネはそれを止めようとするのだが、重いふりそでの下敷きになっている上に、自分達の着ているふりそでもあちこちと布が狭まり、自由に身動きを取る事ができない。そんな三人のふりそでを男達がズラして秘所を露出させようとする、二人は必死になってその手から逃れようとする。マナーとして下着をつけていないために、少しでも布地をめくられたり、ズラされたりしたら恥ずかしい部分が露わになってしまう。それを何とか阻止しようとあがくのだが・・・やはり、動きに制限がかかっては逃れる事などできるはずもない。

「やめ・・・ああ！そこは・・・嫌っ！嫌だっ！やめてえ！」

「こんな・・・嘘でしょ・・・きゃっ！ああああ！」

「おっ！やっぱりノーパンだ！」

「ふりそではこうでないとなー」

裾がめくられて股間が露わになると、綺麗な色をした割れ目が男達の目に晒されてしまう。急激に上昇する体温に顔を赤く染めながら、二人は足を閉じて股間を少しでも隠そうとするのだが、足首を掴まれてそれを阻止されてしまう。その上で、じっくりと視察されると、大きすぎる羞恥に上がりすぎた体温で肌が汗ばんでいく。

当然のようにマーシュもふりそでを剥かれて秘所を露わにしていたのだが、まだ意識が朦朧としているために視線を感じていないせいか、どこかぼんやりとした表情を浮かべるばかり。

「ああ・・・あ・・・あう・・・」

「リーダーさんはまだ戻って来ないか・・・じゃあ、これで！」

そんなマーシュの意識を強引に引き戻すべく、男が股間で膨らんだ凶器を取り出して視線で犯していた場所へと突き立てる。体重をかけつつゆっくりと、味わうように挿入していく。亀頭がズブズブと膣内へと入り込み、僅かな隙間を内側から押すように拡張をしていくと、その鈍い痛みでマーシュが意識を戻すのだった。

「ふぁ・・・あ・・・何やの・・・これ・・・ふえ？ ええええっ?！」

自分の身に起きている事が理解できず、いつもの笑みが消えて不安や恐怖といった色がその顔に浮かぶ。珍しく変わったマーシュの表情をさらに大きく変えるように、ペニスはさらに侵入の度合いを深めて奥へと進む。狭い膣肉がパンパンに拡げられて、最深部へと到達される頃には裂かれた肉の痛みと異物の感触にマーシュの表情はグシャグシャになっていた。

「やめてや・・・こないなこと・・・お願い・・・やから・・・あっ！あくううう！ううう！」

「ポケモンになりたいんなら、このぐらい我慢しなくちゃ・・・ほら、動くよ！」

「そなん・・・くぁ！ああああ！あひいいいい！！」

男の無理な要求にマーシュが困惑していると、そんな彼女の中で陵辱の往復運動が開始される。膣の入り口から奥深くまでをズリズリと肉棒が擦りつつ出入りをすると、狭すぎてほぼ全面が刺激されて酷い苦痛が下半身から走る。大きすぎる痛みで身体がビクビクと震えるのだが、重いふりそでが拘束具となってそれを押さえつける。そのためほとんど位置がズレたりせず、往復はかなり楽に行われてマーシュを苦しめる。

その様子をきっかけとして、キリカとシオネの二人にも男の凶器が突きたてられて往復運動が開始される。

「んんんっ！んはぁ！あ・・・ああああ！うわああああああ！」

「ひぐうううっ！うああ！ああ！うくううう！」

三人とも男を知らない純潔の花園の持ち主だったために、強烈な破瓜の痛みで悲痛な叫びが上がって腫からは涙が零れ落ちていく。腫からは透明な、秘所からは赤い涙がとめどなく溢れて、女の肉が濡れほぞっていく。それを男は容赦無く突きまくり、一方的に快楽を貪りまくる。

「やめてえ！お願いやからぁ！ああぁ！こんなの堪忍てえ！痛っ！うああああ！」

「中でっ・・・んはぁ！ああぁ！そんな暴れる・・・なっ！んはぁ！ああっ！くああ！」

「こんな事が・・・許されるわけ・・・んんんっ！くう！うああああ！」

男達に往復運動をやめるよう懇願の悲鳴を上げるのだが、三人の訴えは無視されて、むしろ激しさが増していく。ペニスが少しでも快楽を味わえるように動き、自身の性感を肉ヒダへと擦りつけるのを繰り返しまくる。少しでも多く性感を擦りつけるように往復の速度が上がリ、刺激が強くなるように激しく肉同士がぶつつけられる。体内で暴れるペニスによって、三人は中から自分が壊されていくのをひしひしと感じるのだった。

「あが・・・ああぁ・・・あひい！ひいいい！」

「こないされたら・・・うち・・・もう耐えれへんよお・・・うちのせいでこないなっ・・・皆・・・ごめんなぁ・・・」

「ああああ！あくう！うううう・・・くううう！」

「中で暴れられて・・・アソコが裂けちゃう・・・壊れちゃうよお・・・」

「っく！ううう！あぁ！あがが！ああぁ！」

「どうしてこんな・・・事をするようなやつが・・・いるのよ・・・」

泣き震える三人を本当に壊してしまうような突き上げが繰り返されて、子宮を貫通して脳天まで突き抜けるような衝撃が走る。そんな奥まで何度も激しく突き上げられると、少女の身体と心は耐えられる限界を越えてしまいそうになる。ペニスによって秘所だけではなく、心まで壊されてしまいそうになっていると・・・。

ビュッ！ビュクビュクビュクンッ！ドピュドピュドピュンッ！！

「ポケモンになりたいジムリーダーさんよぉ！ポケモンみたいに”使われ”て、かなりポケモンに近づいたぜ？これはお祝いだ！」

「ごっちの子にも・・・ああっ！出すよっ！全部受け止めてっ！」

「ふりそでなんてエロい格好して・・・本当はこういうのされたかったんだらう？！うっ！うううう！」

男達がいいように三人に言葉と精を吐き出して、その粘ついた感触を嫌でも身体で味合わされてしまう。絡み付いてくる熱さは絶望でしかなく、三人はすっかりポロポロになっていた身体をより惨めに汚されたショックによって暗い所へと落ちてしまう。腫が急速に光を失って虚ろになり、身体が諦めて抵抗をやめてしまう。肉人形のようになっていく三人を男達は満足げな笑みを浮かべて眺めつつ、存分に射精をし終えてペニスを引き抜く。

たっぷりと中出しされた精は引き抜かれるのと同時にドロっと溢れ出て、あたりにむわっとした臭気が立ち込める。

「「「・・・」」」

すっかり反応の無くなった三人を男達は相手を取り替えて再び犯し、それを繰り返して・・・完全に壊れきって肉奴隷となった所で、弱りきった所でゲットして、手持ちに加えるのだった・・・。



熱いバトルができるバトルシャトレヌで、今日も4姉妹は対戦手を打ち負かしていたのだが、ひとりの挑戦者の前に善戦したものの敗れてしまう。本気でバトルに挑んだ4姉妹を打ち破る程の実力を持った挑戦者を称えようと、ステージに4姉妹が全員集まった所で意外な言葉が挑戦者から出るのだった。

「じゃあ、4姉妹は好きにしていいいんですね？」
「「「「・・・え？」」」」

驚きにポカンとなる4姉妹が慌てて言葉の意味を尋ねようと、オーナーの姿を探すのだが、どこにもその姿は見当たらない。そこで、挑戦者が声をかけた男に視線を向けると、男は一枚の紙を取り出して4姉妹に見せ付けるのだった。

そこには今日からオーナーがその男になった事、そしてバトルシャトレヌの運営を変更する事、今日から挑戦者は4姉妹に勝ったら好きにしていいいなどが記されていた。

自分達には何の通知も無く決まった事に反発して、そんなのはなしだと言おうとするのだが・・・それよりも先に挑戦者が動く。
「じゃあ、さっそく！」

「憧れの皆さんとこういう事ができるなんて・・・最高です！」
「頑張った甲斐がありますね！」

「きゃっ！ああ・・・何を・・・するん・・・ひっ！やめや・・・ああ！嘘やろっ？！」
「ウチにこないな事・・・ああ・・・するなんて・・・ひど・・・ひっ！ひあああ！」

「わ、わたくしが負けたばかりか・・・こんなっ！いくら契約とはいえ・・・酷すぎるっ！あああ！」
「いやぁー！こんな・・・したくない・・・ひっ！あああ！」

嫌がる4姉妹に挑戦者が群がり、お気に入りの子を犯し始める。憧れていた相手を自由にできるせいか、欲望に火がついて完全にケダモノとなって、ドレスを乱暴に脱がして普段は隠されている部分を露わにしていく。

4姉妹それぞれの胸や秘所が露わとなると、ある者は順調に成長した膨らみを持ち、ある者はまだまだ未発達だったり、姉妹ごとの特徴が目を楽しませる。だが、それらすべてに言えるのが、まだ男を知らないということ。

「ああ、やっぱり素晴らしい・・・」
「これが・・・ルミタンさんの・・・」

「ラニユイちゃんのオロンコ・・・身体と同じでお子様サイズで可愛いね！」
「いつも強気なラジュルネちゃんを俺の好きなように・・・っ！」

純潔を保ったままの4姉妹の割れ目は綺麗な薄桃色をしており、そこに最初の一発をぶち込めるのは酷く興奮と歓喜を持っていた。男達の股間はただ眺めているだけだというのにムクムクと膨れ上がり、スポンの中で窮屈そうに脈打つ。

それをスポンから出して自由につつ、割れ目以外の場所を撫で回したり、揉みしだいたりして、男達の方は着々と準備を進めていく。
「こんな・・・ありえへん！何が契約や！そないなの・・・認められるわけが・・・」

「そ、そうや・・・いくらなんでも・・・」
「・・・なっ！どうしてっ！こんなっ！」

「嫌はいー・・・でも・・・やらんといかん？」
4姉妹は強く抵抗こそしなかったものの、こんな事態は認められないという態度を取るのだが、オーナーは変更された契約書にしっかりと4姉妹のサインがある事を見せ付けて、さらにいくつかのモノを見せる。

そこには控え室で着替えている様子や、お風呂やといれでの様子だったり、様々な場面であられもない姿を晒している4姉妹が撮影されていた。もし逆らったら・・・それらがどうなるか？そう言われてしまえば、もう逆らう事などできない。澁々と男達を受け入れるしかなかった。

「さあ行くよ！」
「これが・・・憧れの・・・」

「ずっと楽しみにしてたんだよ！」
「今度はこっちで楽しもう！」

ヴァギナをまさぐっていた男達の手がピンク色のクレパスを無理にこじ開けると、その硬い入り口めがけて股間で勃起きったモノを押し付ける。異様な熱さを持ったモノが押し付けられて、それがギチギチと肉門にその先をぶつけて入り込んで来る。少しづつ体内に広がってくる熱さと、それが増える程に酷くなっていく破瓜の痛みに、4姉妹が涙を零す。

瞳から透明な雫が落ちていくと、それに合わせたように下半身からも赤い雫が滲み出て、結合部を濡らしてポタポタと床に向かって落ちていく。
「ひっ・・・ああ・・・かはあ・・・」

「ぐううう・・・あう・・・ううう・・・」
「痛っ・・・うあああ！こんな・・・のっ！」

「ああああ・・・いやばい・・・これ・・・いやばいばいばい・・・」

先端部分が入り込んだ所で男達は一息つき、力を溜めるようにしてからグイッと腰を押し込んでくる。硬い膣内を一気に貫かれて、子宮口近くまで挿入をされてしまうと、一瞬で増えた異物の感触に息が止まりそうになる。身体を震わせる破瓜の痛みに耐えようとしていると、それを一蹴するように男達は腰を動かして思い思いに快楽を求めてくる。性感を刺激するために膣内へガリガリとペニスを擦り付けられると、破瓜の痛みよりも鋭い痛みが下半身から込み上げる。

「むむむ・・・無理やぁ！こないなの・・・無理っ！耐えれんよお！」
「あう・・・ううう・・・痛い・・・です・・・うああ！ああああ！」

「わたくしの・・・中がっ・・・あああ！壊れる・・・こんな・・・されたらっ！つあああ！」
「動いちゃダメはいい・・・あぐっ！うううう！お腹があ！あああ！痛いはいいはい！」

初めての女性に男達には興奮すぎるピストンの連打に、4姉妹は身を震わせながらポロポロになっていく。その様子はさらに男達を興奮させて、腰の勢いは強まるばかり。ガツガツと子宮を亀頭で殴られる度に、その衝撃でビクリと震えてドレスや帽子などの着衣が乱れていく。半裸状態からさらに衣服が乱れていくと、そうなった姿にさらに男達は興奮をして・・・ケダモノ達の暴走はまるで止ましそうにない。

「またぁ！あああ！奥までズズンって・・・ふあああ！あう！うううう！無理ばい・・・こんなされたら・・・ラニユイは・・・あああ！」

そんな陵辱の中でも特に危険なのがラニユイで、4姉妹の中でも一番幼いためにペニスによる苦しみは一番酷かった。明らかにペニスよりもサイズの小さな膣穴へ無理に挿入されて、狭い穴を強引すぎる拡張をしながら往復されまくる。お腹が破裂するような、下半身がちぎれてしまうような、そんな恐怖と痛みが続けられると、まだ幼いラニユイは心も身体も耐えられそうにない。陵辱の中で時折姉達が声をかけてみても、反応するのが少なくなってきて、その瞳からは意識が消えて虚ろになって・・・別の光が宿っていく。

「あは・・・あははは・・・」
何かが壊れてしまったように、ラニユイの口から笑い声が零れるようになって、姉達はギョウとする。自分達は何とか耐えられたが・・・妹は。酷すぎる陵辱に心が壊れてしまったのだろう、どこか困ったような笑みを浮かべながら、ラニユイはそれまでとは違った反応を見せるようになる。

「こんな・・・夢ばい・・・あるわけ・・・あはは・・・」
「そんな・・・ラニユイ・・・」

妹の変貌に姉達が愕然としている間にも男達の責めは強さを増していくばかりで、体内を貫くペニスの勢いはさらに増していく。そんな状況で心が壊れた妹を見せ付けられては、ギリギリで保っていたものも決壊してしまいそうになる。それを狙ったかのように、男達も姉妹達を驚かすように言葉をぶつけてくる。

「ほら、ルミタン・・・いつものように歌ってみてよ！そうすれば辛くなるよ？」
「無口なルスワールちゃんの喘ぎ声可愛いね！そういう声も出せるんだ！？」

「ラジュルネちゃんも、妹みたいに楽になっちゃおうよ・・・ほら！」
男達は落ちてしまえと言いつつ、姉妹の秘所をズズンと突き上げて身体の芯を揺さぶり、時折胸元に手を伸ばして乳房を揉みつつ先端を刺激してみたりする。下半身に意識が集中していたせいか、乳房を摘まれて胸元から刺激を送り込まれると、不意を撃たれた身体は激しくビクつき、今度はそちらに意識が向いたせいで下半身からの刺激に大きく反応してしまう。

そんな揺さぶりをかけられてしまうと、我慢の限界も早くに訪れてしまいそうだ。
「や・・・やめてきんしゃい・・・もう・・・あああ！やめて・・・きんしゃい・・・いいっ！」

「き、聞かんといえ・・・そんな・・・嫌あ・・・こないな声・・・出しとらないのに・・・ぐすっ・・・ううう・・・」
「誰が・・・貴方達なんか・・・ううっ！ぐうう！うああ！あああああ！」

男に言われるがまま公式のキャンペーンソングを歌い始めてしまったルミタンは、それに合わせてやめてと懇願するのだが、それがかえって心を壊してしまう。こんな状況で歌うようなものではないのに歌わされている。それが酷く心を苦しめる。ルスワールの方も、悲鳴とはいえ無口な彼女の数少ない声というのを喜ばれて、それをネタにされると、どうしようもないくらいに心が締め付けられる。不安からまり声を出さないと自覚しているからこそ、そういう部分を色々と言われるのが苦しかった。

何とか持ちこたえているラジュルネだったが、それは姉妹達がいるからこそで、もし自分が落ちてしまったら・・・どうなるかわからない。そんな姉妹から男達はさらに快感をひり出して、たっぷりと堪能して・・・お代とばかりに欲望の濁流を発射する。ドピュドピュドピュドピュンッ！！

姉妹全員に向けてほぼ同時に精が発射されると、初めてを踏み躪られて赤く染まっていた膣内が白濁で染められる。
「あああああ！いいはい・・・中に出てるはいー！熱いの・・・出てるはいー！」

「ふぁ！あああ！こない出すの・・・やめ・・・きんしゃい・・・ひい！ひあああ！まだ・・・そないにっ！」
「熱いいい！や、火傷しちゃ・・・うう・・・うああ！アソコ・・・焼けとるよお・・・んおおお！」

「ぐうう！こんな・・・わたくしの中に・・・出て・・・る・・・いっぱい・・・ああ・・・出てるはい・・・嫌や・・・これじゃ・・・孕んでしまうはい・・・」

姉妹達は自分の中で果てたペニスが発射した熱い汁の感触によって、女としてつけられたくない傷をつけられてしまったのを感じて、ついにその心が折れてしまう。あれだけ抵抗して耐えようという意思を持っていた瞳からその光が消えて、どこか諦めたような、それを受け入れてどうかしてしまったような、壊れた表情を浮かべるようになってしまう。

それ程までに体内を汚されたというショックは大きく、処女であった姉妹にとっては耐え難いものだった。その結果、姉妹達は男達のいいうように、命令された通りに行動するようになっていって、勝者の「いいうようにできる」存在へと変わっていく。姉妹達を変貌させる陵辱はさらに数時間続き・・・そして。

「あー・・・負けちゃった。それじゃー、今からラニユイが楽しませてあげるけんねー！べるべろーん！」
「ウチの負けや・・・そいじゃ・・・さっそくこっちの相手を・・・」

「あの・・・負けました・・・から・・・そいけん・・・ウチの事・・・お好きにして・・・ください」
「バトルに負けたけん・・・よか・・・アンの好きにするばい・・・どこでも・・・好きに・・・」

バトルシャトレヌは娯館と化していた。4姉妹を求めてやって来る男達と、そんな男達を悦んで受け入れる4姉妹達。バトルこそするものの、それはすっかり形式となっていて、本番はその後。美しい4姉妹との本番行為、乱交こそがメインの場となっていた。そして、その状況を4姉妹はすっかり受け入れていた。今日も快楽と絶望の底に落ちてしまった4姉妹達は、男達の股間に奉仕して悦びの声を上げまくる・・・。



いくら治安がいいといっても、一人旅で・・・それも街の薄暗い路地のような場所を通っていたら、危険は降ってくるというもの。
セレナは道を塞ぐように立ち上がったトレーナーの男達をバトルで蹴散らそうとするのだが、勝負が何度も続いては消耗が激しく通るのを諦めて、来た道を引き返そうとするのだが・・・そこにはいつの間にかさらに集まってきた男達が立ち塞がり、勝負せずには路地から出れないようになっていた。
その結果、散々疲弊しまった所でセレナは敗北して・・・。

「それじゃあ、バトルの賞金を頂こうか」
「おや、足りないねえ・・・これじゃ全然だめだよ」
「じゃあ、その分はこっちで払ってもらおうか？」
「い・・・嫌・・・何を・・・するの・・・っ！」

無理矢理財布を奪われたかと思うと、そこに入っていた僅かばかりのお小遣いを奪われてしまうのだが、金額はいくらであっても男達には関係なかった。
それを理由に、セレナの事を襲うのが目的だったのだから。
取り囲んだ男達が乱暴に手を伸ばしてセレナの衣服を脱がそうとするのを、必死に手を動かして振り払おうとするのだが、数が違いすぎて抵抗はほとんど実を結ばない。

ジャケットと脱がされたかと思うと、今度はブラウスやスカートをめくられて、その下に隠されていたまだまだ成長途中の青い果実が露わになっていく。
男達の手が次々に自分の衣服を剥いでいくのに合わせて、制止の声を上げるものの、どんなにセレナが叫んでも行為は止まりそうにない。

「やめて！こんな・・・嫌っ！誰かっ！助け・・・やああああ！」
「この時間、ここは誰も通らないんだよ」
「お嬢ちゃんみたいな、他の街から来たような子は知らないかもしれないけどね・・・」
「だから無駄だって、誰も来たりしないって」

「そんなの・・・う、嘘っ！誰か・・・たす・・・助けてっ！誰か——っ！」
必死に声を上げるセレナだったが、男達の言うように助けが来る気配は無い。
そんな、まったく人の寄り付かないような路地の中で、セレナの純潔を守っていた最後の一枚が脱がされてしまう。
明るい色の服とは対照的に、まだそういう知識を知らないセレナらしい、清楚な白のショーツが剥ぎ取られてしまうと、綺麗な薄桃色の縦筋が衆目に晒される。
集まる視線の熱さに足を閉じて股間を隠そうとするものの、両足が掴まれてしまってそれを阻止されてしまう。そればかりか、

「さあ・・・こうだ！」
「おお、よく見える！」
「綺麗なピンク色だねえ」
「や・・・ああ・・・み、見ないで・・・やだぁ・・・ああぁ・・・」

男の一人がセレナを背後から抱きかかえると、赤ん坊におしっこでもさせるかのような体勢にして、これでもかと秘所を晒し上げる。
まったく隠す事のできない秘所は視線を無防備のまま浴びるばかりで、セレナの顔が恥辱で真っ赤に染まっていく。
あまりの恥ずかしさに震えるセレナだったが、それ以上に恐ろしさの震えが身体では始まろうとしていた。

「初物かな？ そうだよねえ？」
「おじさんたちが美味しく頂いてあげるからね」
「ほーら、いくよ・・・？」
「やめ・・・やめて・・・嫌っ！そんなの嫌ああああああ！！！」

自分の秘所を眺めていた男達の股間が次々に膨れ上がり、ジッパーが降ろされてその元凶となっていたペニス達が露わになると、セレナの顔には恥辱に代わって恐怖が浮かぶ。

これから犯されるといふのを察した身体はガクガクと震えまくり、歯がカチカチと鳴って言葉が上手く続かなくなる。
貞操を奪われる恐怖から逃れたい一心で身体を動かそうとするのだが、押さえ込まれた身体は僅かにしか動かない。それでは陵辱から逃れる事などできるはずもなく、近づいてきた男が腰を中心に身体を重ねてきて・・・ついに。

「ぐっ！うああああ！あぐっ！くううう！うわああああああああ！！！」
まだまだ男を受け入れるのには早い縦筋にメリメリと亀頭が押し付けられて、膣内へと強引に侵入されてしまうと、身体の中を貫く激痛にセレナの身体がひときわ強く震えて金髪が大きく乱れる。

鋭い痛みが秘所から全身へと広がり、手足が自由に動かせなくなる。どう動かそうとしても痛みで震えるのが大きすぎて、抵抗すらできなくなってしまう。
そんなセレナを男はいいように蹂躪して膣奥まで一気にペニスを突っ込み、そのキツキツすぎる内部の圧迫感がもたらす快感に酔いしれるのだった。

「ああ・・・このキツキツのマココ・・・最高だよお・・・」
「ひっく・・・うう・・・酷いよお・・・こんな・・・痛いの・・・ああ・・・やめて・・・よお・・・」
うっとりとした声を上げる男とは正反対に、セレナの方は涙を流しながら怯えきった悲鳴を零し、もうやめるよう懇願するだけ。
だが、その懇願を乱暴に蹴り飛ばして、男は腰を動かし始める。
ペニスよりも狭い膣内は完全密着状態のため、ピストンされるとカリ首にヒダが引っかかり外へと引っ張り出されるような感覚と共に、内部を擦られる痛みが送り込まれる。

ただ挿入される以上の痛みと嫌悪に、セレナは眼を見開きながら身体をビクビクと大きく震わせまくる。

「ああああ！がっ！きやはぁ・・・ああああ！」
（こんな痛いの・・・無理・・・私・・・おかしくなっちゃうよお・・・痛いで・・・もう・・・だめ・・・）
何度も意識を失いそうになるセレナだが、男の方がそれを見越したかのように腰を止めたり、ピストンを弱めたりして、悲鳴を途切れさせないようにする。
初めての膣内の感触だけでなく、セレナの上げる悲鳴にもまた、興奮させる魅力があり、それを失いたくないのだろう。
意識を失うかどうかの瀬戸際で激痛のピストンを続けられると、それはそれで精神が磨り減りセレナをじわじわと痛めつける。

「あうう・・・うう・・・っく！うあああ！あああああ！」
（どうしてこんな酷いこと・・・何で・・・私が・・・こんな・・・）
後悔と絶望ばかりが込み上げてきて、表情が曇り瞳からは生気が失われていく。
虚ろになりつつある瞳は焦点を定めずにさまよいまくり、自分を犯す男や順番を待つ男達を眺めて、より深い絶望に落ちていってしまう。
手足からは力が抜けて、人形のようにになっていくセレナに向けて、男がラストパートをかける。

「さぁ！初モノのマココに・・・おじさんの精液たっぷり出してあげるからね！」
「ひゃあ・・・ああ・・・やめ・・・てえ・・・出しちゃだめえ・・・そんなのされた・・・ら・・・」
男の言葉に薄れかけていた意識が少しだけ復活して、無駄とは思いつつも制止のつぶやきを零させる。
まだ幼いとはいえ、年齢的にも肉体的にも、セレナは子を宿せるだけの機能を持っているのだから。
女としての激しい嫌悪感に突き動かされて、最後の抵抗をするの・・・だが。

ビュクビュクビュクビュクンッ！！！！ビュグググッ！ドブドブドブンッ！！！！

「あ——っ！出たよ！いっぱい・・・セレナちゃんの中にっ！」
「嫌あああああ！私の中が・・・赤ちゃんの汁で・・・いっぱいだよお・・・赤ちゃんできちゃう・・・できちゃうよお・・・」
狭い膣内に発射された精が隙間を縫うように広がり、ねっとり肉壁に絡みつきながら熱さを内側から拡げて痛みを上書きしていく。
肉体的にではなく、精神的な痛みが今度は全身に広がり、酷い絶望感で憔悴しきったセレナはしばらくと動きを止めてしまう。
痛みで反応すらなくなったセレナに向けて、最後の一滴までの残さず発射した男がペニスを引き抜くと、栓を外された事で小さなヴァギナからダラリと白濁の汁が地面に向かって垂れる。

「気持ち良かったよ・・・セレナちゃんのおンコ・・・」
「こんなに・・・中に出されたら・・・絶対にできちゃう・・・赤ちゃんできちゃうよお・・・そんな・・・の・・・嫌ぁ・・・」
自分の中に広がり、入りきらずに溢れていく熱い汁の感触に打ちひしがれているセレナだが、当然のように新たな男が身体を重ねてくる。
まだ精を零しているヴァギナに勃起しきった二本目のペニスがぶち込まれると、再び走る鈍い痛みでセレナの顔が歪む。
先に射精された精を押し出ししながら、新たなペニスがピストンを開始して、さらなる精をセレナに中出ししようとする。
まだまだ続くであろう陵辱に、セレナは目の前が真っ暗になっていくのだった・・・。

「もう・・・嫌ぁ・・・助け・・・て・・・誰か・・・もう中に出されるの・・・嫌だよお・・・赤ちゃんも・・・欲しくないから・・・中に出さないでえ・・・おねが・・・い・・・」



道路で目の合った相手にバトルを挑み、自分の強さに磨きをかけていたミニスカートのリカと、エリートトレーナーのアスカの二人は、たまたま通りかかった男達にダブルバトルをやらぬかと提案されて、そのために組んでみたのだが・・・。

そこまで意思の疎通ができていない二人は、ダブルバトルをかなりの数こなしているであろう男達に惨敗してしまう。いくら急造のコンビとはいえ、かなり手ひどくやられてしまった二人が悔しそうにしていると、男達は手にしたスプレーを二人にかける。虫よけスプレーとはまったく違う、妙な液体が噴射されて、それを嗅いでしまうと・・・二人は急に目の前が真っ暗になって意識を失ってしまうのだった。

「あっ・・・何よ・・・これ・・・」

「目の前が・・・ああ・・・暗く・・・なって・・・」

・

・

・

途切れた意識が妙な感触によって覚醒をすると、そこはバトルを行っていた道路ではなく、見慣れない場所で・・・二人は自分の身体に発生している異常に気がつく。

目を覚ます時に感じた痛みと気持ちの悪さ。それは、自分の身体を犯す男のペニスによるものだった。

意識を失っている間に犯されて随分と経っているのか、男女の結合部からはかなりの量の白濁の汁がポタポタと零れ落ちており、膣肉も破瓜の激痛を通り越していた。

「う・・・嘘でしょ・・・こんな・・・」

「え・・・え？・・・何で・・・あれ？」

覚醒したばかりの二人は自分の身に起きている事態を飲み込まず、瞳を何度もしばたかせていたが、身体の中に押し寄せてくるペニスの感触によって、少しづつだが理解させられていくのだった。

頭の中でこうだと考えるよりも先に、反射的に身体が動いて男達から逃げようと、結合を解くように暴れ出す。

だが、そんな事は想定したようで、がっしりと腕や腰を掴まれていた。

「このっ！は、離しなさいっ！こんな・・・事っ！嫌っ・・・嫌よお！」

「やめてえ！どうしてこんな酷いこと・・・するのっ！」

男女の力の差というものもあるが、それ以上に気を失っていた間にかんがいの侮辱をされていたせいか、身体に力が入らず抵抗もままならない。

動かそうと思っても、腕や足がまるで石か何かになったかのように重く、のろのろとした動きしかしてくれない。

そんな状態では侮辱を跳ね返す事などできるわけもなく、継続して犯されるだけ。

「ああ、気がついた？寝ているのを犯すのもいいけど、やっぱり反応があるといいね」

「じゃあ、裏のポケパレルをたっぷり楽しもうか」

「何を言ってるの・・・？裏の・・・ポケパレル?!んんっ!んくっ!」

「そんなの知らないっ!いいから・・・帰して!こんなの嫌あ!あああああ!」

男の言うように、ここは裏のポケパレル。本来ならばポケモンとのふれあいをする場を、女トレーナーとのふれあい用として解放している場所。

ふれあいといえば聞こえはいいが、実際には侮辱でしかなく、気に入った女トレーナーを連れ込んでレイプできる場として、一部の男達が使っている負の施設。

二人はそこで行われる侮辱の獲物となって、男達に蹂躪されていた。

「ぬ、抜きなさいっ!コレ・・・くううう!私から・・・抜きなさいっ!汚らわしいっ!ふぁ!ああああ!」

「やめてよっ!ねえ?お願いだから・・・やめてええええええ!」

二人は男達に侮辱をやめるよう叫ぶのだが、その声を聞いてもペニスによる責め苦はまったく止まる気配が無い。

そればかりか、その様子を楽しむように、膣内の様々な部分をゴツゴツと亀頭で突かれてしまう。

まるで本物のポケパレルでポケモンの喜ぶ場所を探すように、ペニスが膣内を突いて自分にとって最も快感を味わえる場所を探し回る。

その動きに二人は強い嫌悪感しか感じず、表情が暗く曇っていく。

無駄とわかっていても抵抗せずにはいられず、何度も手足をバタつかせて男の拘束から逃げようとするのだが、その度に膣奥深くを突かれる衝撃で抵抗を挫かれてしまう。

「あぐっ!ううう!くあああ!あああ——っ!」

「ひっく!うううう!ひゃうううううう!」

意識を失っている間に破瓜も拡張も済まされて、すんなりとペニスの出入りを許すようになっている膣穴は衝撃を遮る事がまったくできず、繰り返されるピストンによってせつかく戻った意識を再び失ってしまいそうになる。

激しく出し入れを繰り返されて、衝撃を送り込まれまくると、身体がガクンガクンと揺れて二人の髪が降り乱れまくる。

大きすぎる侮辱の衝撃に翻弄されている二人の結合部からは、その揺れに合わせてすでに中へと発射された精が勢い良く飛び散る。グチュグチュと卑猥な音を立てる結合部からの白い雫が増えると、あたりには鼻をつくような精匂が漂い嗅覚も二人を犯す。

「どうして・・・こんな・・・エリートトレーナーの私が・・・あっ!うわあ!ああああ!」

「酷いよ・・・私たち・・・なんにも悪い事なんて・・・してないのに・・・ひっ!うううう!」

ポロポロに泣き崩れる二人の膣内をさらに責め上げて、男達は快楽を貪りまくる。

一方的な快楽の搾取によって、何度目となるかわからぬ射精へと加速していくと、それに合わせて突き上げの回数も増えて、二人の身体はさらに激しく揺さぶられる。

体内で暴れまわるペニスによって内側から殴られ続けた二人の身体が痙攣し、抵抗のために動かそうとした手足を勝手にピクつかせてしまう。

「もうやめえ!あああ!んああ!そんなあ!ああああ!」

「嫌あああ!こんなの嫌だよお!やめてえ!お願いだからあ!あああ!ああんっ!」

自分の意思ではろくに動かせない身体が、男によって無理矢理反応させられて、身悶えさせられまくる。

酷く精神的に追い詰められた二人は、無駄だとわかっていても何度も懇願を繰り返してしまう。

そして、その懇願を男達はピストンによって一蹴して、より深い部分を突き上げて快楽を貪る。

「こうやって女の子とふれあうって・・・"おかし"をあげる・・・最高だぜ!」

「じゃあそろそろ"おかし"にぴったりな飲み物でも出してあげようか!」

「何を出すって・・・いう・・・のよ・・・?」

「いらない・・・そんなのいらないよお!」

男達が"飲み物"を出すと言ってピストンのスピードを早めて、膣内にペニスを激しく擦りつけまくる。

先程までより大きく、強く快楽を求めまくって、ペニスを甘い感触で蕩かして・・・袋の中にたっぷり入っている欲望の汁を二人めがけて発射しようとする。

そんな男達の様子を察したのか、二人は動かない身体を無理にでも動かして結合を解こうと必死になるのだが、そんな努力をしている二人に男達は腰をひどく強く突き出し、身体を大きく震わせる。

ドクドククンッ!ビュクククウウウウ!!ビュブビュクンッ!!!

「ひゃうっ!うあ・・・ああ・・・出て・・・私の中が・・・こんな男で・・・」

「入って来ないでえ!こんな熱い・・・ドロドロしたのいらぬよ・・・ううう・・・出て行ってよお・・・」

すっかり踏み躪られてしまった膣肉に何度目かわからない白濁をぶちまけられて、ピストンによって飛び散った分を補給されると、自分の中を満たしていく濃厚すぎる男の子種汁の感触にペニスとは違った嫌悪感を女として感じてしまう。

あまりにも酷すぎる状況に二人は再び目の前が真っ暗になりそうになるのだが、男達はそんな二人に最後まで射精を続けようとする。

だが、何度射精しても男達の興奮はおさまらず、むしろ美人で評判の二人を好きに犯せるという状況に欲望は次ぎから次ぎへと沸き上げてきて、まったく終わる気配は無かった。

いつまでも続くように感じられる侮辱の中で、二人は苦しみに悶え叫ぶばかり・・・。

「エリートマ〇コにまた射精するぞっ!ほら、たっぷり飲めよ!俺の・・・普通のトレーナーのザーメンを!そのエリートマ〇コで!」

「もっともっと射精して、確実に孕むまで射精してあげるからね!ああ!いつもはミニでギリギリ見えるか見えないかだったマ〇コに中出ししまくれるって最高だ!」

「もう・・・出さないでえ!これ以上いらぬっ!中には・・・出さないでえ!」

「お腹いっぱいだからあ・・・もう飲みたくないのお!だから・・・中にそんな・・・出さないでえ!孕むなんて嫌ああああ!」



旅に出てポケモンを鍛えながら先へと進んでいたサナだが、その実力は決して高くはなかった。何度も敗北して目の前が真っ暗になり、失意の中でポケモンセンターへと引き返したりしたのだが・・・今回バトルした相手はそんな結果だけでは済ませてくれなかった。

敗北したサナが引き返そうとするのを無理に引き止めて、落ち込んでいるサナを取り囲む。

「な、なんなんですか？貴方達・・・っ！」

「なあ、強くなりたくないか？いい薬があるぜ？こいつを使えばポケモンが凄え強くなる・・・効果はバトルで今見せた通りだ」

確かに、驚く程に相手のポケモンは強く、サナは一方向的にやられてしまったが・・・それでも、そんな薬を信じられるわけがないし、薬に頼るなんて。

と、思って男の申し出を拒否するのだが、まるで納得するまで通さないとはばかりに、男達がサナの周りを固めてくる。

手持ちのポケモンが一体もない今の状態では自分の力だけで、女手だけでそれを突破せねばならず、とてもではないが不可能だった。

「そんなのいらないから・・・どいてっ！通してっ！」

「そう言わずにさあ・・・どう？」

「強くなれるぜ？」

「何なら、お試して一回やってみてもいいぜ」

しつこくサナに付きまとう男達に怯えつつ、サナは頑なに拒絶を続ける。

すると、それを無理にでも変えようというのか、男が注射器を取り出したかと思うとサナの腕を掴んで薬物を注射してしまう。

咄嗟の事で反応する事ができず、すべてを体内に入れられてしまったサナは、注射された腕を抱きしめるようにしんがら男達を睨みつける。

「何するのよ?!変な薬を・・・注射・・・して?ふえ？」

驚きの成分が多い怒声を男達にぶつけたサナだが、それがすぐに弱まり、抱きしめていたはずの腕を取り落としてしまう。

腕に力が入らない、と思った瞬間には膝が崩れて地面へとへたり込んでしまって、自分の体重をやたらと重く感じてしまう。薬のせいでこんな風になったというの

はわかるけど、ではどうすればいいのか?となると、さっぱりわからない。

その場に崩れてどうにもならないでいるサナを男達は仰向けにすると、だらりと弛緩した身体に手を伸ばす。

「この薬は本当に良く効くんだけ?これを使ってからトレーニングをすれば効果が何十倍にもなる」

「人間にはちょっと違った効き目になるけど・・・自分の身体で確かめてみるよ」

「こいつがいい薬だってわかれば”欲しく”なるだろうからな」

「ふあ・・・ああ・・・や・・・めてえ・・・」

薬で身体が自由がまったく利かないサナの事を、男達はいいように翻りまくる。

まだ発育中の身体を包む衣服を乱雑に脱がし、その下に守られていた褐色の肌を露わにすると、かなり平坦で曲線の少ない少女の身体を撫でまわす。

発育しきっていないからこそ、青い果実を楽しめる。それを喜ぶように胸の膨らから、また硬い膣口まで、身体のほぼすべてを堪能されるように触られて、弄られ

まくり、好きなようにされてしまう。

男の手が自分の身体に何かする度に、サナは身体を小さくビクビクと震わせる。

「さわら・・・ないでよ!!ああ!そんなとこ・・・きゅ!!ああ!!いやぁ・・・ああ!!」

薬のせいで反射的な反応も弱まり、口も自由にまわらないせいか、まるで男達が等身大のラブドールを使っているようにすら見える。

ラブドールとなれば当然、挿入もされるもので・・・男達も準備が整ったモノからサナへと突撃していく。

少し緩まっているとはいえ、初めての膣肉はかなり硬くて狭い。そこにペニスが龟头を押し付けて力任せに突入してくると、膣肉がメリメリと押し潰されながらの進入されてしまう。

「ひいいい!ひああ!ああああ!!」

「は、入ってきたあ!あたしの中につ!嫌あ!ふ、太いよ!痛い!熱い!何でこんなっ!」

体内に侵入してきた異物の感触が大きくなり、膣奥まで貫かれた頃には下半身が申刺しにでもされたような感覚すら覚えるくらいに痛みと嫌悪で溢れかえる。

だが、自由にならない身体はそれを受け止めるしかなく、サナがどうする事もできない苦しみに震えていると、追い討ちをかけるように両手を掴まれて、ペニスを握らされてしまう。

まだ力が入らないので男が手で支える必要はあるものの、太い肉竿に手のひらが乗せられて、細くて柔らかい指を性感へと押し当てられてしまう。膣穴だけでなく手までも、いいように使われてしまうと、まるで自分が男達の精を処理する道具になったように感じて、涙が自然と零れてしまう。

「あぁ・・・ううう・・・っく・・・くううう」

「あたしの身体・・・こいつらに使われてる・・・こんな好き勝手されて・・・酷いよ・・・こんなの・・・」

ジュブジュブとペニスが膣穴を出入りすると、狭いために膣肉を外に引っ張り出すかのような感触が下半身から込み上げてきて、サナは吐き気と共にビクビク震える。

上半身のほうも、両手でペニスを扱くのに使われているのを嫌という程に感じてしまって、その辛さに涙が止まりそうにない。

上下からの陵辱苦痛にサナは酷い勢いで踏み躪られてボロボロになっていく。だが、そんな嫌悪と苦痛の中で、サナはどこか快楽を感じているのも自覚していた。薬のせいとしか思えないのだが、身体が徐々に熱くなってきて、ペニスが膣肉を擦ると感じてしまう。そんな、心とは正反対の反応もサナを苦しめていた。

そんな弱りきったサナの前に、ひょこっと見知った顔が現れる。

「皆、やってるねー」

「おっ、セレナ?お友達の紹介ありがとよ」

「今丁度、薬の効果を実践中」

「これが終わったらお前もやる?お友達と一緒にどうだ？」

「それもいいねー。・・・サナ?どう?気持ちいいでしょ?その薬を使うと、最高に気持ち良くなれるんだよ?サナも早くその味を知って欲しいな」

「セレ・・・ナ・・・どうして?そんな・・・嘘・・・」

自分の身体を蝕む薬の事を絶賛し、サナが早くその効果を受け入れるべきだと言うセレナに、信じられないといった視線を向けると、そこには暗い笑みを浮かんでいた。

男達に犯されて、望まぬながら薬を受け入れたのでは浮かばないような、自分から求めてそうなったような、酷い笑みがセレナには浮かんでいた。

絶句したサナを覗き込むようにセレナが顔を近づけてくると、スッと唇を重ねる。

「んんんっ!!!!」

「セレナっ!何をっ!いきなりっ!」

男に犯されたのよりも大きな驚きにサナが目を白黒させていると、強引に舌が挿入されて舌同士が絡み合う。

ねっとり舌を絡ませながら唾液を吸われて、吐息を吸われていると、脳が痺れそうになる。

そんなキスがしばらく続き、ようやく唇が離れてみると、二人の間にはねちゃっとした糸がかかる。

「んふう・・・ほうら、サナも早くさ・・・気持ち良くなっちゃおうよ?サナがこっちに来てくれると、私は嬉しいな・・・」

「ふあああ・・・はあ・・・はあ・・・そんな・・・こと・・・」

あれだけ嫌だった陵辱も、熱烈なキスの後にセレナから誘われると少しだけ違って感じてしまう。

痺れてしまった頭は友人の言葉にフラフラと付いていこうとして、陵辱を受け入れてようと、どこかで思ってしまう。そうなる、今もヴァギナを犯して、両手を使われている状態は快感でしかなく、急激に意識が傾きそうになるのだった。

僅かばかりの理性が快楽に落ちるのを繋ぎとめていたけど、それもいつ切れてもおかしくないようなもの。ギリギリでの状態が続くサナを落すために、セレナは男達に合図する。

「ほら、皆!サナに出してあげて!そうすればきっと、こっちに来てくれる・・・ふふふ」

「だ、出すって何を・・・嫌よ・・・いらぬ・・・いらぬからっ!」

身の危険を感じたサナが恐怖に顔を引きつらせながら懇願するのだが、男達の快樂抽出のペースは速まりまくり、もう止まりそうにはなかった。

サナの肉から得られる快感で膨張の度合いを高めたペニス達は、ついに・・・

ドクッ!ドクドクダウンッ!ビュビュビュブッ!ドピュドピュドピュンッ!!!!

「熱いっ!ひい!あああ!ああああ!出て・・・るよおお!!」

サナの身体に溜まりきった欲望の汁を発射して、全身を白濁で染め上げていく。

大量の白濁は身体の中や外を汚し、肉へとねっとり絡みついてその熱を伝えてくる。髪の毛から足の先まで、そして膣の奥までも、身体の中と外のすべてに向

かってぶっかけられた精液に、サナは溺れてしまいうようになる。

そんな中でどうしようもない絶望を心が感じて、何も考えられなくなっていくのだが、そこにセレナが囁く。

「皆の精液気持ちいいよ?熱くてドロドロの精液・・・オ○ン○の奥で受け止めるとキュンキュンしちゃうでしょ?ねえ?サナ？」

「あう・・・ううう・・・そんな・・・こと・・・」

「そうだって・・・身体は感じてるじゃない。こんなにビクビクって震えちゃって。ね?素直になろうよ？」

セレナの言うように、身体は快感を感じてはいたが、それは薬によるもので心は最後まで拒絶をしていた。

だが、絶望に染まって心が折れてしまったサナには、そういうのはどうでもいいような、遠い事のようにも感じられる。

そこで感じたと認めよう、と友人に言われてしまうと、それがおかしくても従ってしまいうようになる。

「ちが・・・う・・・感じて・・・なんか・・・ないっ!」

「まだダメか・・・じゃあ、皆でもっと可愛がってあげて!」

「了解。それにしても、お前は・・・友達想いだよな」

「当然でしょ。サナ?早くこっちにおいで?一緒に楽しもう？」

ギリギリで踏みとどまるサナをさらに犯して心を砕き、快樂に落としてしまえとセレナは男達に命令する。

その姿もサナを酷く絶望に近づけるもので、二度目の陵辱が終わる前には決着がつきそうでもあった。だが、例えば途中でサナが落ちたとしても、セレナは行為を続けさせるだろうし、さらに何度もやらせるだろう。

そうやって完全に落ちるまで、徹底的に輪姦陵辱が続けられて、サナは薬漬けの快樂奴隷になるのだろう・・・

「サナ・・・待ってるからね？」

「や・・・セレナ・・・嫌あ・・・こんなの・・・嫌よお・・・いらぬ・・・もうオチンチンも・・・精液もいらぬかぁ・・・ああ!!」



メガシンカの研究をしていたフレア団によって拉致されたコルニは、研究開発のために必要な情報を吐くよう要求されるのだが・・・こんな汚い手でメガシンカを求めよう相手にもコルニが口を割るはずもない。

そうなるという言葉ではなく暴力で・・・力づくで情報を吐かせようとしてコルニににじり寄る男達は、年齢にしては発育した膨らみや、育ちきっていないからこそその魅力を放つ曲線を見て、ただの暴力ではなく性的な暴力によって口を割らせようとするのだった。

「きゃっ！どこを触って・・・あぁ！やっ！やだぁ！そんな・・・あぁ！あたしの身体に・・・そんな所を触らないでよっ！ひゃっ！あぁあぁ！」

「嫌ならメガシンカについて吐くんだな・・・でないと・・・」

「誰が・・・あぁあ！やぁ！あぁあぁあ！」

男達の要求をコルニが突っぱねると、それを待っていたかのように指先が動き、スポーティーなシャツやスパッツの下へと潜り込む。直に触られるのはただ服の上からとは違って強い嫌悪感と、女としての危機感をコルニに伝えてきて、ほんの少しか話してしまおうと思ってしまう。だが、そんな弱い心にかかと落としをくらわして、コルニは必死に耐えようとする。こんなヤツラにメガシンカの事を話すわけにはいかない、その想いの方が強かった。

「無理せず吐けて・・・それとも、こういうのが好きなのか？あぁ？！」

「そんなわけ・・・ないっ！ひいいい！あっ！いやぁ！あぁあ！・・・んんんっ！」

嫌がるコルニの肌を男達はいいように撫でまわしてその若くて健康的な感触を楽しむと、布地を掴んで一気に引っ張る。ビリビリと大きな音を立てて服が破れてしまうと、ついにコルニの素肌が男達の前に晒されてしまう。恐怖と羞恥がコルニの顔に浮かぶと、ほんの少しか抵抗する心が弱まるものの、ぐっと歯を噛み締めてそれに耐えようとする。

「ほら、ほら、ほら！さっさと吐いちゃいな！それとも・・・これが欲しいのか？」

「んんっ！・・・んひっ！ひい！そ、そんなの・・・嘘でしょ・・・」

男が股間から取り出した勃起しきったペニスを見て、コルニははっきりと青ざめる。ただ触られるだけなら耐えられたかもしれないが、あんなモノで犯されたら・・・不安が浮かび、少しでも心に暗い影が落ちてしまうとそれまでの強さが保たなくなってしまいそうになる。

それを察した男達はコルニを取り囲んでペニスを並べると、ソレでコルニの肌をツンツンとつつき、亀頭を押し付けながら最後通告をするのだった。

「ほら・・・吐いちゃえよ・・・でないと・・・」

「だっ！誰が・・・言う・・・もんか・・・あっ！ひあぁあぁあぁあ！」

背筋や首といった部分だけでなく、腋やふとももにもペニスが押し付けられてその異様な熱さで脅されても、コルニは決して屈したりせず抵抗の意思を見せる。それを見た男達はしょうがなく、といったポーズを取りながらも嬉しそうに、コルニの身体を犯し始めるのだった。ヴァギナとアヌス、そして口と、3つの穴へ同時にペニスが突っ込まれて一斉に純潔を奪われると、激しい喪失感にコルニは目の前が真っ暗になりそうになる。酷い痛みと異物の感触が身体の中と外で溢れて、どうしようもないくらいに辛くて、心を強く持っていたはずなのに瞳からは涙が零れてしまう。

「んむっ！うううっ！んむううう——っ！」

（こんなたくさんのが・・・あたしの事を汚してる・・・身体中が・・・こんなので・・・）

肉穴に侵入したペニスは一気にその奥まで貫くと、すぐにピストン運動を開始して快楽の抽出を開始する。破瓜の痛みだけならば耐えられたかもしれないが、ピストンによって肉が擦られ内部から殴られると、初めての痛みにもコルニは無防備にやれ続けるだけで、心が急速に弱くなってしまふ。

その様子を感じ取ったのか、男の方も腰の動きを強めて攻勢に出る。

「その強がり・・・いつまで続くかなっ！ほらっ！どうだっ！」

「んんんんっ！んぐっ！ぐぐぐ・・・んはぁ！あぁあぁ！」

（アソコとお尻が・・・痛い・・・口の中も・・・気持ち悪い・・・手や髪までこんなので・・・あぁあ！これじゃ・・・）

口内に突っ込まれたペニスは喉の奥まで到達して、尿道から滲む先走りの汁を直接飲ませつつ、竿に唾液を絡めて舌の上を往復する。ヴァギナとアヌスに侵入したペニスは最深部を連続して叩きまくり、身体の芯を崩すようなピストンを繰り返しながら、キツキツの肉穴から得られる快感に脈打ちを激しくさせていた。

そんな穴を犯すペニス以外にも、コルニの手では包みきれないようなペニスが握らされて竿をしごくのを強要されていたし、大きく左右にアーチを作っているツイーンテールの髪がペニスに巻き付けられて髪コキまでされていた。身体の様々な部分を犯されると、弱まっていた心は折れる寸前まで追い込まれてしまう。酷すぎる陵辱に対して、初めて男を知ったばかりのコルニはあまりにも無防備だった。

「はっ・・・ううう・・・うあぁ・・・」

（こんなヤツラに負けるわけには・・・いか・・・ない・・・けど・・・っ！）

折れそうな自分の心を必死に鼓舞しようとするコルニだったが、そのために使えそうな何かが思い浮かばず、身体中から襲い掛かる陵辱の衝撃によって身も心もポロポロにされていくだけ。

すっかり弱りきったコルニにトドメを刺すべく、男達はペニスで責めるよりも快楽を求める方に比重を置くようになる。

そうやって快楽で自身を薄けさせて、女にとって最も苦痛となるモノを発射しようとしていた。

「んっぐ！んぶっ！うううっ！うあぁ！」

（もう・・・これ以上は・・・）

「これでも喰らって・・・吐いちゃいな！」

コルニの限界が訪れるよりも先に、男達の方が快楽で限界へと達して次々に欲望の汁を吐き出していく。

ドピュドピュドピュドピュウウウウ！！ピュッ！ピュプププウウウッ！！

「んむぁ！あぁあぁ！あが・・・かっ！かはぁ・・・」

（身体中に熱いモノがかかって・・・ベトベトになってくよぉ・・・嫌ぁ・・・これ・・・酷い・・・よぉ・・・）

まだ精液がどういふものかはっきりと知ってなくても、身体はそれを出される事の意味を知っていて、汚され傷モノになったという意識が刻み付けられる。そうなるとコルニの心はガクリと折れて、すべてを話してしまおうと・・・そうして、少しでも楽になりたいと思ってしまう。

「あぁ・・・あう・・・ううう・・・」

「どうだ？吐く気になったか？」

コルニを取り囲むペニス達が欲望のすべてを吐き出し終えると、そこには中も外も白濁まみれになって震えているコルニの姿があった。その瞳にはもう抵抗らしい抵抗の光は見えず、犯され汚されきった苦しみでポロポロになった者だけが持つ空虚さと、絶望が浮かんでいた。もう、メガシンカについて尋ねれば何でも情報を引き出せそうだったが・・・性欲に火がついた男達にとって、それはどうでもよかった。

「じゃあ、今度はこっちだ！」

「おおっ！コルニの足裏っ！かかと落とししてる足裏での足コキっ！」

「メットと髪の間を蒸れ蒸れ最高っ！」

情報を引き出すよりもコルニを犯す事を男達は欲して、コルニをさらに蹂躞し始める。

まるで終わりの見えない輪姦陵辱にもみくちゃにされながら、コルニは暗く沈んでいく・・・。

「・・・・・・」

（いつまで・・・続くの・・・これ・・・もう終わってよ・・・オチンチン・・・もう嫌だよ・・・熱いかけられるのも・・・中に出されるのも・・・嫌ぁ・・・）



よくジムを空けてフラフラとポケオンの撮影に出かけているピオラは、特別なポケオンの撮影ができる。という話に乗って怪しげな場所に連れていかれたピオラは、到着してすぐに案内した男や、周りで待ち構えていた男達に取り押さえられて、無理矢理押し倒されてしまう。

話が全部嘘だったのだと察して逃げようとするものの、数人がかりで押さえつけられてはそれもできず、あまり女性らしくない格好だが、かえってそれが健康的な色気を放っている身体を好きにされていく。

タンクトップがめくられて、その下につけていたスポーツタイプのブラが剥がれると、若干小ぶりながらも形のいい乳房が露わになって、ピオラの顔が怒りと周知に赤く染まる。

「あっ・・・貴方達っ！やめなさいっ！こんな事・・・許されるわけが・・・あああ！」

抑えられても必死に手足を暴れさせて、最後まで抵抗を続けるピオラだったが、それをものともしないで男達は服を脱がしていく。

今度はデニムに手が伸びて、ベルトを緩められてズリズリと下ろされてしまうと、ブラと同じで素っ気無い白のショーツが露わになって、ピオラの顔はさらに赤くなる。

羞恥に顔を歪めながら抵抗を続けるピオラだが、そんな彼女の口元に男が何かを寄せて、抵抗の言葉を発した瞬間に強引に飲み込ませてしまう。

「やめ・・・っ！んぐう・・・んっ・・・何を・・・」

「それは育て屋が使う、ポケオン交配用の薬さ。そいつを飲んだら“やりたく”なるぜ・・・」

「う、嘘でしょっ？！そんなの・・・人に・・・」

交配させるために、雄と雌を興奮させる媚薬。それもポケモン用のものを飲まされてしまったピオラは、効果を疑問視しながらも効いてしまった？という不安が顔に浮かび、抵抗する力が弱くなってしまう。

どうなるのかわからず、手足を思うように動かすのに躊躇していると、そこを突くように男達の責めが押し寄せる。

下着が完全に剥ぎ取られて露わになってしまった女性部分に指が触れると、柔らかい膨らみと硬い縦筋の上下二箇所が同時に責められてしまう。

乳房が何度も乱暴に揉みしだかれて、ヴァギナは閉じている口に指が突っ込まれて、無理に開かされてしまう。

蹂躪される身体は嫌悪に震えて、ピオラは思い出したように暴れるのだが・・・そのうちに異変が襲ってくるようになる。

「あ・・・ああっ！何・・・これえ・・・ひっ！っく・・・うううっ！」

男達の責めは嫌悪しかなく、無理にやられているため痛みも酷かったというのに、それが恐ろしい勢いで薄れていって、変わりに快感が溢れてきたのだから。

信じたくなかったが、どうやら薬が人間の身体にも作用したようで、無理に交配ができるような状態へと、持っていかれてしまう。

そうなると、もうピオラの意思だけではどうにもならず・・・。

「あああああ！ふああんっ！あっ！おっばい・・・そんなっ！触っちゃ・・・あああああ！アソコもっ！ダメえ！うわああああ！」

「どうやら効いてきたみたいだな・・・流石はモンスター用、凄い効き目だぜ」

「まったく、科学の力って・・・スゲーな！」

「ほら、身体に従っちゃえよ！ほらっ！」

薬の効果を確認した男達によって性感を刺激されて、これでもかと快楽を送り込まれると、身体はビクつきまくって震えるのが止まらない。

表情からも羞恥が消えて、恍惚が浮かぶようになってきて、あれだけ暴れていた手足は抵抗をやめてしまうようになる。そして、逆に男達の邪魔をしないように、快感を求めるように身体を開いて、求めるように動くのだった。

それだけ身体が自然と快楽を求めても、ピオラは心の奥底で僅かながらも抵抗を続けていた。

このまま快感に流されないように、快感に抗うピオラだったが、それを嘲笑うように男達の責めは激しくなり、同時にいくつもの性感が刺激されまくって、身体がいやらしく悶えまくる。

「ふぁ！ああああ！ああああ——っ！！！」

（気持ちいい・・・こんな気持ちいいの初めて・・・だけど・・・負けちゃダメ・・・ダメよ・・・こんなのにつ！）

もうすっかりピオラの身体が快楽に蕩けたと判断した男達は、身体から手を話して股間のモノを突き立てようと準備に入る。

快楽が途切れて、男達が手を離している今こそ脱出の機会だったが、快楽の余韻が強すぎて自分で身体を起こす事もできない。

横たわらせている身体を時折ビクリと悶えさせながら、荒い呼吸を繰り返しているピオラに、男達はペニスを次ぎから次ぎに突き立てる。

「それじゃあ、有名ジムリーダーのオオンコ・・・ゲットだぜ！」

「何なら記念撮影しよっか？」

「ひやうっ！ううううっ！うわぁ！あああああああ！ふああああああんっ！！！」

（い、嫌っ！こんな・・・犯されるなんて・・・なのに・・・どうしてえ？！こんなに感じちゃうよ！身体が・・・感じすぎてっ！これじゃ・・・イっちゃうっ！イクの止められないよお！）

快楽に蕩けきっていたヴァギナはずぶ濡れになっていて、ペニスをすると飲み込み歓喜に震える。

キツキツの膣肉がうねりまくり、竿を抱きしめてヒダで撫で回すと、男の方も快楽に身体を震わせる。それでもさらに腰を落として侵入の度合いを高めていくと、強烈な締め付けによって股間が蕩けそうになる。

男もピオラも強すぎる快感をさらに求めるようにして、行為は加速していく。

腰が強打を繰り返して圧迫してくる膣内を強引に突っ切り奥深くを叩くと、入り口まで戻って再び膣奥めがけて突進する。その繰り返しを受け止めながら、膣肉はより感じる場所にペニスが触れるように、よりペニスが感じて強打してくれるように動く。

「あああああ！あっ！うあああ！あっ！ううううっ！」

（おかしくなる・・・こんなに感じてたら・・・耐えられない・・・おかしくなっちゃうよお・・・）

快楽に押し流されそうになる意識を必死に繋ぎ止めるピオラだったが、強烈すぎる快楽は理性を飲み込みそうだった。

このまま快楽に落ちてしまえば、身体に従ってしまえば楽になる・・・そんな風にすら思える。

だが、そうやって陵辱を認めてしまうわけにはいかないと、快楽の濁流で細すぎるロープにピオラはしがみつきの続ける。

「あああ！やっぱピオラさんのオオンコ最高！キュンキュン締め付けてくるぜ！」

「ほら、こっちも相手して！こっちも！」

ヴァギナ以外にもペニスが迫り、手で愛用のカメラではなくギンギンに勃起したペニスを握って、手コキの奉仕をやらされてしまう。

そればかりか、タンクトップから覗いていた魅惑的な臍や、お腹にもペニスが押し付けられて、その柔らかい肌の感触を亀頭で堪能されていく。

身体中に押し寄せるペニスの感触は完全に快楽となっていて、ピオラの身体は休む事なく悶えて、口からは嬌声が零れ続ける。

「んはぁ！あああああ・・・あうううっ！っくっ！うううっ！」

（嫌だ・・・こんなので悦ぶのなんて・・・嫌だ・・・でも・・・もう・・・）

絶え間無く続く快楽に心が弱気になっていくと、それを察したかのようにペニスの攻勢が強まり身体が芯からガクガクと揺さぶられる。

ペニスの快楽衝撃が全身を駆け抜けて、ピオラの精神も屈服してしまいそうになる。

と、そんな時に男達の動きが示し合わせたように停止して、ピオラの身体が一瞬だが快楽の余韻だけの状態となるのだが・・・。

ドピュドピュドピュドピュンッ！ビュルビュルビュルルルッ！ビュククッ！ドクドククンッ！！！」

「あ・・・ああああ——っ！！ふあああああああああっ！！！」

（こんなの・・・む・・・り・・・っ！）

男達が停止したのは射精の前の一瞬、大きな波の前に海面が引いていくようなもので、次ぎの瞬間には大量の精液がピオラめがけて発射される。

大量の白濁が頭から爪先まで、そのすべてを塗り潰すようにぶっかけられて、ねっとりとして身体に絡み付いてくる。

ジワっとくる熱さは身体にピストン以上の快楽を発生させて、ピオラの身体は壊れてしまいそうなくらいに悶えまくり、その顔がアヘリまくって・・・ついに心が快楽へと落ちてしまうのだった。

それ程までに射精による快楽は強烈で、特に中出しされた精による膣内からの快楽漬けは、抗う間も与えないで理性を溶かしてしまう。

「ふぁ・・・ああ・・・はぁ・・・ああ・・・」

まだおさまらないとばかりに発射され続ける精を身体に浴びて、射精と同時にアクメに達した身体がさらに二度目三度目のアクメへと昇り詰めていく。

止まらない絶頂はピオラを快楽の底へと引きずり込み、もう元へと戻れなくしてしまう。

「は・・・あはは・・・いいよ・・・凄いいよ・・・いい・・・気持ちいいよ・・・」

どこか壊れたような笑顔とも、虚脱した顔とも取れない表情を浮かべながら、ピオラは最後の一滴まで発射し終えた男達にうっとりとして囁くのだが、それはあまりにも小さすぎて届かない。

微かすぎて聞こえなかったせいか、何もしない男達に向かって今度ははっきりと、ピオラが甘すぎる声で言い放つ。

「・・・もっと。もっとしてえ！気持ちよくしてえ！私のアソコに・・・手に・・・腋にっ！もっとオチンポ頂戴っ！」

淫靡に求めてきたピオラに対して、男達はまったく萎えそうにない股間のモノで応える。

「いいんじゃないっ！いいんじゃないのっ！あああ！これいいっ！いいよお！オチンポ気持ちいいっ！いいよお！・・・精液もっ！

いいのよ！凄くいいのよ！だから・・・もっとズボズボしてっ！私にいっぱい精液出してえ！」

再開された行為にピオラは歓喜の声を上げてヨガリまくり、ずっと離さないでいたカメラでそんな自分を何度も撮影する。

そんな、快楽に落ちたピオラへの誕生祝いにもするように、男達は先ほどよりもさらに激しくピオラを犯して、快感をこれでもかとひとり出して、最後には求められた精をぶちまけていく・・・。

「いいっ！ズンズン来るのいいっ！熱いのかかてるのいいっ！いいのよ！いいんじゃないのよおおおお！おおおおっ！！！」